学科　ライフスタイル学科	所感
氏名　丹羽　誠次郎	ティーチング・ポートフォリオの作成は、日頃は忙しさにかまけて省みることが少ない自身の教育活動を俯瞰するよい機会となっている。授業が学生の成長につながるように科目毎には少しずつ工夫を加えてきたものの、「教育の理念と目的」に掲げた理想に現実が追いついていないと思う。2020 年度、新型コロナの影響から幾つかの担当科目がリモート授業へ切り替わったため、新たな教材準備に多くの時間を割くことになったが、この大きな見直しによって授業の運営方法に新たな可能性も見いだすこともできた。そこでの経験を踏まえてさらに試行錯誤を繰り返した 2021,2022 年度に続き 2023 年度でも授業内容の修正を続けたが、まだ途上の感が強い。2024 度は、学部長として家政学部全体のマネジメントがあらたな職務となった。校務が仕事の中心とな理、自身の授業改善に取り組むことがやや疎かになってしまった。次年度に向けては学部長の業務と並行して、授業改善にもしっかりと取り組んでいきたい。

家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa 型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

イ　ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。

ロ　管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

ハ　こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。

1　教育の責任

私は家政学部の家政学科家政学専攻／ライフスタイル学科の前身である生活文化コースの助手として着任した 1994 年以来、31 年に亘って学生の指導に当たってきた。その中で、2024 年度はオムニバス科目を含めて合計 7 科目担当をした。2023 年度の担当科目数が 14 科目であったため、前年度から担当科目は半減したことになる。これは、今年度から学部長となり学部運営の業務を担当しなければならなくなったためである。単独での担当はライフスタイル学科の専門科目のうち住分野とデザインに関する科目であるが、その他に学部長として家政学部 3 学科合同でおこなう初年次教育科目「潜在能力の開発」「未来へつなぐアウトリーチスタートアップ」の全体調整を行なっている。また、学外での公開講座も積極的に行なっている。

科目名	学科	開講期	受講者数	備考
ライフスタイル学基礎講座	ライフスタイル	1 年前期（2024）	40	オムニバス
住生活論	ライフスタイル	1 年前期（2024）	40	ライフスタイル学科必修科目
ベーシックデザイン	ライフスタイル	2 年前期（2024）	36	
インテリアデザイン I（住宅）	ライフスタイル	2 年前期（2024）	39	ライフスタイル学科必修科目
卒業研究	ライフスタイル	4 年通年（2024）	6	ライフスタイル学科必修科目
潜在能力の開発	家政学部 3 学科	1 年前期（2023）	136	オムニバス
未来へつなぐアウトリーチスタートアップ	家政学部 3 学科	1 年前期（2023）	136	オムニバス

2　教育の理念と目的

「これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案」できるように、大学４年間の学びでその基礎を築き、さらに卒業後も学び続け、成長し続けられる人になってもらうことが、最終的な目的である。そしてその「新しいライフスタイル」は美しく豊かなものでなければならない。「美しい」ものにたくさん触れ、「美しさ」を理解し、「美しい」表現ができるようになる–学生たちにそのきっかけを与えることが私の役割だと考えている。

3　教育方法

実習授業で課題を設定する際には、学生が自分ごととして取り組めるような内容を心掛けている。それぞれの課題を進めるにあたって、エスキースの提出、チェックを細かに行なっている。また、ソースとなる参考事例を集めさせて、その情報を受講生同士が共有する機会を授業時間内に設けている。また、プレゼンテーションと受講生相互の講評を行うことで、成果物のデザインコンセプトや手法を言語化することを求めている。成績評価にあたっては成果物だけでなく口頭でのプレゼンテーションの内容も含んでいる。エスキースを含む制作途中での提出物は学修態度として評価に加えている（添付資料 2）。

4　授業改善の活動

ここ数年、学生の発言や発表の機会が多くなるように、授業改善を進めている。授業改善にあたっては、各学期に FD 委員会が開催する公開授業での先生方の授業実践も参考にしている。また、「ベーシックデザイン」の実習では 2017 年度にグループワークを取り入れた課題内容に大きく変更を行ったが、成果は芳しいものでなかったため、一旦、旧来のスタイルに戻し、2019 年度に別の形のグループワークを設定した。

2020 年度前期は、コロナ禍の状況で、多くの科目をリモート授業に切り替えなければならず、その準備に奔走させられた。しかし、遠隔でも授業内容がしっかりと把握できるように教材の充実を図った。その結果、対面授業に戻った 2021 年度においても授業内容を充実させることができた。

また基礎的な造形訓練を行う「ベーシックデザイン」の実習も 2020 年度はリモートで行わなければならなくなったため、授業時間の多くを講評に充てる反転授業に近い方式を採用した。授業時間内での作業時間を大幅に削ったことと、リモートでも指導可能なことを考慮し 1 課題ずつの内容を簡素化した。

2021 年度は対面の実習授業においてその課題を踏襲した。各課題についてきめ細かな講評を行うことは学生たちにとってよい振り返りの機会となるが、その分、成果物の完成度に不満が残る結果となった。

2022 年度は講評の時間を多少短縮し、作業時間を増やしたものの、問題の解決には至らなかった。

2023 年度はコンピュータを用いた配色のエスキースなど更なるアプローチを試みたが、成果には結びついていない。「ベーシックデザイン」や「インテリアデザイン I」では手作業を重視し、身体的な造形感覚を涵養することをひとつの目的としているが、それに対する学生たちの意識や能力は年々低下しているように思われる。今後、（今年度試みたように）実習授業にもコンピュータを使っての学修の機会が増えていくことになるだろうが、身体で空間を把握し判断することの重要性を大切にして教育を続けたい。また個々人のエスキースチェックを公平確実にかつ丁寧に行う方策や授業時間外の学修時間を含めた上で課題の適切なボリュームについても継続して検討すべき課題として残り続けている。

2024 年度は学部長としての初めて取り組まなければならない業務に忙殺され、大幅な授業改善に取り組むことはできず、細かな修正を行なうにとどまった。

5　学生の授業評価

2024年度の授業評価は添付資料のとおりである（添付資料4）。以下、個人で担当した科目について授業アンケート結果より転載する。

「住生活論」（ライフスタイル学科 1 年前期）…ほぼすべての項目で 4.2～3.8 ポイントで前年度よりも 0.2 ポイント程度のプラスとなっている。ただし Q6「学修内容を明確にし、シラバスに一致した授業方法を実施した」についてのみ 3.6 ポイントで 0.4 ポイントのマイナスとなっている。今学期の授業もシラバスの記載内容に準拠し、昨年度まで

の授業内容をベースにより丁寧な運営を心がけたつもりだったが、学修内容のポイントが学生たちに明確に伝わっていなかった（理解されていなかった）ようである。

次年度以降は、授業のポイントを整理して学生たちの理解を促す時間を多く設けるなどの対応をとっていきたい。自由記述は4件のみで「とても優しくて良かったです」「学ぶ内容はたくさんあって大変だけど、授業の初めに前回の復習をしてくれたことで記憶が定着しました。」など、いずれも肯定的な回答であった。但し、指導教員による学生面談では7名の学生が難しい授業科目として「住生活論」を挙げている。学生たちの満足度がさらに高くなるよう、改善を続けていきたい。

「ベーシックデザイン」（ライフスタイル学科 2 年前期）…授業運営に関する質問（Q1～7）についてはほぼすべての項目で 4.3～4.2 ポイントで、昨年度と大きな変化はない。ただし Q6「学修内容を明確にし、シラバスに一致した授業方法を実施した」のみ 4.0 ポイントであった。授業はシラバスに記載した通りに進行していたが、課題の意図についても丁寧に説明したつもりであったが、学生たちに十分に伝わっていなかったようだ。今後は課題毎にその内容と到達目標の要点についてさらに丁寧な説明をしていく必要がある。自由記述への回答は「課題量を少なくしてほしい」…1、「楽しかった」…2であった。題量については再検討を行う。また、学生たちがもっと楽しんで学修に取り組めるよう、さらなる改善を行っていきたい。

「インテリアデザイン I（住宅）」（ライフスタイル学科 1 年後期）…Q1～Q7のポイントは4.3～4.1で、ほぼ全ての質問で昨年度より全0.2～0.1ポイント高い結果であった。しかしQ2「教員の説明は明確で理解しやすかった」に対して1名（2.9%）のみではあるが、「あまりそう思わない」という否定的な回答が寄せられている。今後、授業内容・方法の再検討を行いつつ、学生たちの理解度も見極めながら丁寧な学生指導と授業運営を心がける。自由記述は２件あり、「家の外観なども自分で考えてみたいです」「前期と後期ありがとうございました！分かんない時寄り添ってくださって頼もしかったです！またよろしくお願いします！」と、科目の内容と教員の指導に対して好意的な評価であった。

６　学生の学修成果

学生たちの学修成果を顕著に見いだすことができるのはライフスタイル学科での学修を総合して取り組むプロジェクト型の授業「スタジオ A,B,C」での実践である。2015 年度より始まったこの取り組みは、学生の主体性を伸長させることができている。その成果は学内で行われている「『学びの泉』グランプリ（旧称：社会人基礎力 育成グランプリ大会）」で報告され、2024 年度までの 9 回中 7 度、最優秀賞を獲得している（2020 年度は新型コロナ禍のため中止／2022 年度は創立 110 周年特別賞）。但し、今年度からは「スタジオ A,B,C」の授業担当から外れており、アドバイザーをして関与することしかできていない。

７　授業科目に関連した教材開発

４～５週で１課題を完成させる「ベーシックデザイン」では課題毎に全体の見通しができるようなシートを作成している。逆に半期 15 週で１課題を作り上げる「インテリアデザイン」では、最初に全体の見通しを示したのち、課題を完成させるまでの各ステップでシートを配布している。講義科目「住生活論」では、各回の授業終了時に予習内容を含めた次週の授業プリントを配布、授業で提示したスライドは Google classroom で公開、授業の振り返りは Google フォームを使って行わせている（添付資料 2※前掲）。

８　指導力向上のための取り組み

2016 年度、2017 年度に愛知学泉大学学内ＧＰにそれぞれ「観察から記述へ−「書く力」育成プログラムの開発−」、「家政学専攻版「暮しの手帖」を作る−感性と書く力の育成−」を申請し、採択された。そこでは、山田と丹羽を中心に、雑誌「暮しの手帖」の記事をひとつのモデルとして、家政学専攻教員全員の協力のもと、「感性」と「書く力」を同時に育成することを目標に授業に取り組んだ。
2020 年度にはスタジオ関連科目において学生の主体性を発揮させるために「足場かけツールの研究・開発・活用」に山田とともに着手し、同内容を愛知学泉大学学内ＧＰへ申請、採択された。
2021 年度は正課外教育の充実を図り、学生たちが社会人基礎力を発揮する機会を増加させることを目的とし、山田、平岩と「正課外教育における社会人基礎力育成の試み」を愛知学泉大学学内ＧＰへ申請、採択された（添付資料 4）。
この正課外教育の一環として 2021 年度より岡崎未来城下町連合と連携した「商店街街灯フラッグデザイン」の指導を継続中である（添付資料 5）。
これらの教育実践の成果についてはなるべく早い段階で大学紀要などに発表したい。

９　今後の目標

今年度は学部長、カリキュラム委員長として家政学部 3 学科のカリキュラム変更をおこなうことができた。今後も継続して教育内容の見直しを行い、全ての学生が大学の教育目標を達成できるような環境づくりに取り組んでいきたい。また本学独自の「自学・共学システム『学びの泉』」の完成に向けての努力を続けていく。2025 年度はとくに「感性：直感力」と「身体：自然体」の解説・行動目標の設定に注力する。

10　添付資料

添付資料１「シラバス」、添付資料 2「授業配布資料」、添付資料 3「授業評価アンケート結果」、添付資料 4「愛知学泉大学学内ＧＰ申請書」、添付資料 5「未来城下町岡崎街灯フラッグデザイン案」